「風の旅人・2011 年 10 月・44 号」（株）ユーラシア旅行社

川田喜久治　top

表紙 | 裏表紙

© Kikuji Kawada

FIND THE ROOT
此岸の際①

CONTENTS

日光―実語 1
写真・文／川田喜久治

大陸民としての「今」 21
文／姜尚中

音の学習、日本の手技 26
文／大橋弘

かがやけるうねばらの金と色 43
文／山下智子

赤富士を見届ける、耳上の金箔師 46
文／宮川 充

裏日本 47
写真・文／清田 浩

UCSまれ 67
文／菅 啓子

アナトリア 71
写真・文／宮崎弘道

建築の創造 89
文／菅 広明

モンゴリア 91
写真・文／エルデンダライ・アロハン

森生の土 109
文／望月通陽

ASIAN IDENTITY 113
写真・文／中野正貴

「あれい」に触れられる 121
文／小倉博史

ヒンドゥのエネルギー遺跡（東・南インド［ユーラシアの旅］） 125

これまでの百年、これからの百年［ふるさと留学］ 128

建築は、家とお庭のこと。 129
写真／中島敏彦　文／佐藤 剛

ゾーン 133
文／田口ランディ

ヒトの間 137
写真・文／望月光

それぞれのモラル―不法と貧困 151
文／伊勢崎賢治

消失の像 153
写真／小林正典　文／佐藤 剛

まほろば
superposition

人間と自然の間には、人間が作り出した物が横たわっている。
人間は、考えることで、人間と自然の間を離したり埋めたりするが、
自然を作ることはできないし、自然に戻ることもできない。
しかし、人間が考えて作り出した物が、人間と自然の間をつなぎ、
人間の心や世を鎮め、平和をもたらすこともある。
人間は、自然を作れず、自然を切り離せず、自然に戻れず、
考えることで作ることで自然との距離を少しずつ変容させながら、
その間で全体のバランスをうまく保つ術を探して、生きていく。

風の旅人／編集長　赤珍剛

表紙・裏表紙写真／川田喜久治

日光——寓話

川田喜久治
KAWAI KIKUJI
1933年生まれ 東京都出身

日ごと、闇を食する夏帝の国は栄華きわまりないと「暴風」すなわち「転変の書」は伝える。最古の皇帝はみな闇であり、それは知恵をあらわし、エンペラーの象徴でもあった。皇帝の座を闇面、その頭を闇頭、頭去すると闇の背にのって天に昇られたと、民に告げられる。

万物顔応をみちびきだした中国の天地創造の話を聞けば、二つの互いに補う永遠の原理、陰と陽の、律動的な結合から、あまたの存在がうまれた。女と男、闇と光、同じように、虎と鼠は数え切れぬ存在を生み出すための、一つの原理でもある。数え切れない存在とは宇宙や世界のことにはかならない。

日いずる神話「三国」の、とある時代の将軍に闇にもまさる智力の持ち主がいた。国中に群雄が割拠していたころ、前歌の聴く争いが繰り返されたが、その智力であっという間に鎮めてしまった。のちの将軍の機動たるや皇帝と見まごうほどであった。

時がながれ、山東大明、北の雲地に将軍は死後の自分を神と祀るように命じて世を去っていった。

いつしか、その霊廟は深い森の中にたくさんの花が咲き競う鉄物と金色鋼鐵の社殿や鐘楼が極楽浄土を思わせると国中に知れ渡ったのだ。

拝殿の軒下、大広間の天井や壁面いたるところに、名匠たちの手になる無数の龍が描き彫られた。あの龍と虎の聞こえる鉄金からは見たこともない鏡や鏡面子、鈴鳴、鳥鳴、鶴、鶴や鶴が生まれた。この幻獣たちは日々あらたに生きるべく動き回った。

北極星の光が落ちる夜の夜、雪にかすむ安全体がカゲロウのように揺らめく、「鏡鳴の帝国」と呼ぶにふさわしかった。夏は降るヒグラシの声に共鳴したあまたの龍が空を飛び交ったのである。

ところが百花繚乱を競うだたちと幻獣のあいだで争いが起きた。たがいに鏡鳴を競いあい見栄と武望をほしいままにしたのだ。鏡い鏡争が始まったが、最後は龍が雲雲の国を制してしまった。優美な鳥鳴も奥の拝殿から姿を消している。三匹の鏡が寄しくも残った。見ざる、言わざる、聞かざる、その聖獣が龍の波鳴にふれなかったらしい。

それからどこからともなく風評が立つようになった。天下を支配した龍の鳴りを一個でも取り去ろうとすれば、あの拝殿の軒下から鳥がしたたり落ち、雲はあとかたもなく崩れ落ちるという。

秋に紅葉が地に溜けると、黒いカオスの雲が雲山の中島にある大きな湖に現れる。雲にみえるのは龍の尾か、将軍の運の鳥だともいう。湖に架かる白い橋は何処まで続いているのだろうか。わたった人は帰れないことを意知っている。

だれかがまた嘆いている。「鳴も雲も完成させないわけは、完成した鏡間から絶壁が始まるからだ……」と。

日の落ちた深い森にさらなる龍の咆哮が、鉄炭の屋は震えながら万葉の恐怖を語ろうとしている。闇の奥で将軍が孤独な影のように雲鳴の前端に茫然と立ち尽くしている姿を村人は見たという。